



授業

50分間の授業で自分は何を どう学びどう変化したか? 生徒に気づかせ学びを深める

追手門学院中・高校（大阪・私立）



写真左から、辻本義広教頭、学習推進部長の阿部 宰先生、探究科主任の池谷陽平先生。

アクティブラーニング型授業の一環としての授業内でのリフレクションに加え、探究や日々の終礼でもリフレクションを実践しています。

授業、探究、HR、部活動：実践事例

2

019年の新校舎への移転に伴い、教育改革を加速してきた追手門学院中・高校。生徒自身の気づきや変化を可視化し学びを深める手段として、「授業・終礼・探究」の3つのシーンでリフレクションを実践している。導入を進めてきた辻本義広教頭、学習推進部長の阿部 宰先生、探究科主任の池谷陽平先生にお話を伺った。

背景・ねらい

生徒の学びを深めるためにリフレクションを取り入れる

「かつては偏差値を上げ大学に合格させるための授業をしていた」と辻本教頭は自身を振り返る。テストや課題を与えて生徒に強制的に学ばせることに限界を感じ、教育者としてのあり方に悩み模索するなか出会ったのが、アクティブラーニング型の授業だった。感銘を受けた辻本教頭は視察や体験を繰り返し、自らの授業にも取り入れた。すると、大きな変化が見られたという。「最初に説明をして、個人やグループでワークをして、最後はリフレクションで終わる。授業のデザインを変えてみたら、一気にクラスの雰囲気が変わった

んです。なんといっても、生徒が学びに向かう姿勢が変わりました。これだ、と自分のなかで確信して授業改善を重ね、学校全体にも広がっていきたいと考えました」

新校舎への移転に際し、校内では「どういう生徒を育てたいのか」「そのためにはどういう教育をするのか」という議論がなされ、ディプロマ・ポリシー（DP）とカリキュラム・ポリシー（CP）として明文化された。例えばCPはこうだ。『本質的な問いに対する「内省」を通じて、また、他者に「共感」し、他者と「協働」すること、あらゆる自分に「気づき」、自らの価値観で正しく「判断」できるようにする生徒の育成。このDP・CPに基づき、「具体的に生徒に何を体験させたいか」を教員間で議論し、「問う」「気づく」「共感する」などの「動詞」に落とし込んだ

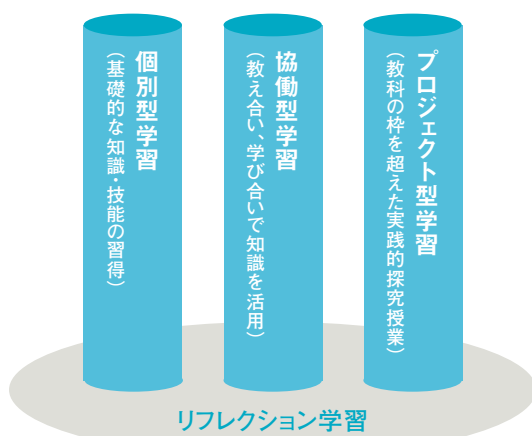
図1：「授業」で生徒に経験させたい具体的経験

新たな学び「授業改善」	習得	活用		探究	リフレクション	
		個別型の学び	協働型の学び	プロジェクト型の学び		
スキル	対話・創造力	観察する 傾聴する 質問する	表現する 経験する 想像する	貢献する 創造する 対話する	協働する	
	判断・決断力	解答する 繋げる 思い出す	選択する 発見する 情報収集する	実現する 決断する 意思決定する	判断する	
	思考力	理解する 解釈する 読む	(自分に)置き換える 比較・対照する 疑問に思う	評価する 抽象化する 分析する	生み出す 見通す 描く	内省する
	0	1	2	3	コア	
コンピテンシー	学ぶ力	暗記する 繰り返す 記憶する	問う 楽しむ 好奇心を持つ	挑戦する こだわる 興味関心を持つ	探究する 没頭する やりきる	問う
	自己理解		感じる 開示する 受け入れる	向き合う 自覚する 承認する	見直す 肯定する 変容する	気付く
	思いやり		感じる 尊重する 受け入れる	共有する かかわる 承認する	思いやる 信頼する 肯定する	共感する

(図1)。これにより「どう学ぶかの目標設定を、コンセンサスをもってできるようにした」と辻本教頭は振り返る。「アクティブラーニング型授業」として対話や協働が目ざされがちですが、生徒の学びが深いものになるかどうかの分岐点はリフレクションなのではないかと考えています。まずは自分自身を振

学校のさまざまな教育課程のなかで、リフレクションを活用している学校に取材し、そのねらいと実践、生徒の変容についてお話を伺いました。

図2:「3つの学び」の融合



学びを振り返り継続させるリフレクションを軸に、個別型学習・協働型学習・プロジェクト型学習の3つの学びを融合したカリキュラムにより、変化の激しい時代を生き抜くための力を養う。

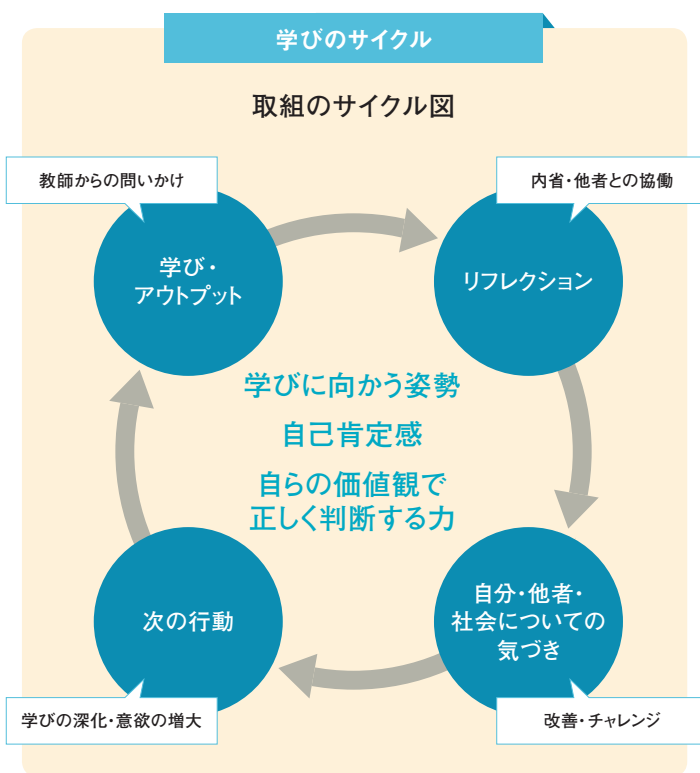
「授業」におけるリフレクションは、教員ごとにスタイルも使うツールもさまざまだが、内容面の振り返りだけでなく生徒自身の気づきを促すよう設計されている。阿部先生は、自らの英語の授業での事例を挙げながらこう話す。

「例えば、黒人男性のジョージ・フロイ

実践「授業」
**自分に何が起こったのかを
 問いにより気づかせ可視化する**

り返る。そして、そこで得た気づきを表現する。これにより学びが深まり、さらに次のチャレンジにもつながる。こうした学びのサイクルが生まれる学習方式を本校では「リフレクション学習」と名づけ、これを軸に学びをデザインしています

〔図2〕



ドさんが殺害されたニュースの動画を視聴し、その後、「自分の捉え方の面で、何か変わったことはないか」と問いかけ、生徒に書かせます。ここで、あった・なかったの二択で終わってしまつては、たとえ生徒のなかで感じたことがあっても記憶に残らず流れてしまいます。大事なのは、50分間の授業のなかで自分はどう変わったのか、自分に何が起こったのかという気づきを促し、可視化すること。変わったことがあったならどう変わったのか、なかったなら他に何か感じたことはなかったかと、表現に奥行きが生まれるような問い、考えるきっかけとなる問いの設定を意識しています」

問いは先に投げかけることもあれば、あえて何も言わずに教材を提示し、後から問いかけることもあるという。「リフレクションは思考を促し、学びを深める手段。目的になりがちなので、そこは注意している」と阿部先生は言う。

一方、現在も数学と探究の授業を担当する辻本教頭は、数学の授業において、オリジナルの振り返りシート(図3)を作成。授業の最後5〜10分をリフレクションの時間にあてている。シートの上半分では自己評価やできたことを項目に沿ってチェックし、下半分では学習内容や行動、他の生徒からのフィードバックを振り返り、気づいたこと

を記述する仕立てだ。

「振り返るのは、自分ができたことや良かったこと。最初はチェック部分だけで、これはいわば作業的な振り返りです。慣れてきたら記述部分を増やしていきます。学んだことや学習への取り組み方から、クラスメイトからのフィードバック、さらにそれを踏まえての気づきと、考えて言語化する内容を少しずつ広げていきます。そして、生徒のリフレクションは、次の授業の最初に、グッドプラクティスとしてクラスみんなの前で名前は出さずに紹介します。すると、こういうことを書けばいいんだ、こういう人もいるんだと、クラスの雰囲気が変わってくるんです。全体での共有はとても大事だと感じています」

生徒の変容

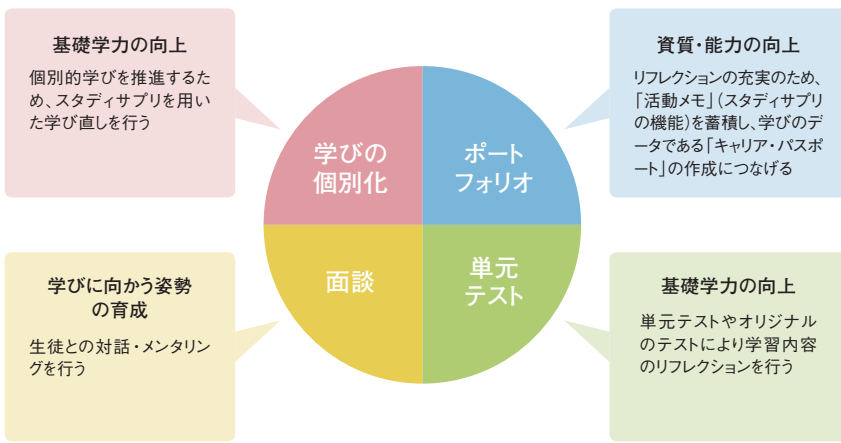
**生徒同士の学び合いが進み、
 クラスの雰囲気が変わる**

「成績に直結するものではなく、リフレクションだけの効果とは言い切れない」としながらも、阿部先生は「クラスの雰囲気や学びに向かう姿勢は確実に変わってきた」と言う。

「教員がうまくファシリテートして生徒主体の授業デザインができていくクラスは、ぼんやりしている生徒がいなくなります。生徒たちの間でも、わからないことは教えてもらい、わからない子がいれば教えるという学び合いが常態化しています。リアルな関わり合いのある学



図4:「追手門モジュール」の実施内容



火～金曜日の終礼時(25分間×4日)には「学びの個別化」「ポートフォリオ」「面談」を日替わりで、土曜日の終礼時(50分間)には「単元テスト」を実施し、週3単位の学校設定科目としてカリキュラムに組み込んでいる。

図3: 辻本教頭作成の振り返りシート

ダウンロード可

今日の学習行動の振り返り(内訳)と次回に向けて

今日の学習行動(対話)を振り返り、活動して学びを深めたか? 番号に○をいれよう
5. 完璧! 4. ほぼOK! 3. まあまあ 2. なんとか 1. 少し 0. 全然

今日の学習行動の中で良かったことをメモを入れてみよう。【セルフチェック】

□内容が共有できた
□納得することができた
□共有することができた
□質問することができた
□聞かずに聞いておくことができた
□聞かずに聞いておくことができた
□聞かずに聞いておくことができた
□聞かずに聞いておくことができた

今日の学習内容(やったこと)を振り返って、「重要なこと」や「学びの気づき」をメモして書いてください。
今日の学習内容(やったこと)を振り返って、「重要なこと」や「学びの気づき」をメモして書いてください。
今日の学習内容(やったこと)を振り返って、「重要なこと」や「学びの気づき」をメモして書いてください。
今日の学習内容(やったこと)を振り返って、「重要なこと」や「学びの気づき」をメモして書いてください。

授業でのリフレクションを拡張したのが、昨年度から始まった「終礼」のリフレクションだ。「追手門モジュール」と名づけられ(図4)、「学びの個別化」「ポートフォリオ」「面談」「単元テスト」の4つからなる。平日(火～金)の7時間目と土曜日の3、4時間目を廃止し、終礼を平日25分間、土曜日50分間と長めに設定。この時間を追手門モジュールにあてている。「思い切ってカリキュラムを大きく改訂し、幅広い観点で生徒が自身の学びを振り返る時間にあてた」と辻本教頭は話す。

そして、辻本教頭が「本校のリフレクションの取組を牽引するもの」と言う

自分から集団、社会へと気づきの枠を広げていく

「放課後に生徒たちが自発的に集まって勉強する姿が見られるようになったと感じています。生徒からの質問の質と量も変わってきました。以前は試験前には多くの生徒が質問に来て、その内容も漠然と『わかりません』だったのが、今では数自体がぐんと減り、内容も『この問題のこの部分がわからないんです』と具体的な相談になりました」

実践「終礼」探究

具体的な課題を設定して探究するという一般的な探究学習とは異なり、同校の探究では課題探究の土台となるマインドセットに重点を置く。出発点は、自らの価値観の探究だ。レゴ(シリアスプレイ)や写真、動画、コラージュ、お面づくりといったアートの創作活動とリフレクションを組み合わせ、学年を追うごとにパーソナルからソーシャルへと探究の対象を拡張していく。「中高6年間で課題探究・解決へのマインドセットしかできなくても、長い目で見ると十分に意味のあることだと考えている」と池谷先生。探究科専属と兼務を合わせて11名の教員が探究の授業を担当し、探究で得たリフレクションのスタイルを他の科目の授業に取り入れる動きも出ている。

「生徒たちはインプットばかりでアウトプットする場がありません。アウトプットの機会がなければ振り返ることもできませんし、特に探究は自分ごと化しませんが、だから、まずは自分を出してみようというのが本校の探究です。そのアウトプットに対してリフレクションすることで、自分自身について気づき、集団での役割に気づき、学びへの原動力や社会課題への関心、自己肯定感の向上へとつなげていきたいと考えています」

今後の展望

「生徒の気づきを促し学びを深めるためには、問い立てが非常に重要です。本質的な問いの立て方・投げ方のスキルを教員自身が身につけるため、来年度からは年間の研修プログラムにも織り交ぜていく予定です。大事なのは、トップダウンではなくミドルリーダーから広げていくこと。その牽引役として、探究科には大いに期待しています(辻本教頭)」

カリキュラムの改訂にも踏み込んでリフレクション学習を取り入れてきた同校だが、「まだまだ模索中。教師自身のリフレクションや協働が十分ではなく、ファシリテーションもスキルアップが必要」と辻本教頭は現状を語る。生徒の学びの質をより高めるため、3人の先生はそれぞれ次の打ち手を考え、展望を描いている。

「探究では活動のフェーズごとにリフレクションを繰り返して、最終的には校外での活動や真に主体的な進路選択につなげていきたいと考えています(池谷先生)」

リフレクションを支える問いや授業デザインの質を上げる

「探究では活動のフェーズごとにリフレクションを繰り返して、最終的には校外での活動や真に主体的な進路選択につなげていきたいと考えています(池谷先生)」

「探究では活動のフェーズごとにリフレクションを繰り返して、最終的には校外での活動や真に主体的な進路選択につなげていきたいと考えています(池谷先生)」